慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	サン=ランベールの道徳思想： 『百科全書』項目「利益<<Intérêt>>(Morale)」の典拠研究
Sub Title	La pensée morale de Saint-Lambert : étude sur les sources de l'article dans l'Encyclopédie
Author	井上, 櫻子(Inoue, Sakurako)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2017
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. フランス語フランス文学 (Revue de Hiyoshi. Langue et littérature françaises). No.65 (2017. 10) ,p.55- 66
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10030184-20171031-0055

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

サン＝ランベールの道徳思想

――『百科全書』項目「利益 « Intérêt »（*Morale*）」の典拠研究――

井　上　櫻　子

前々号掲載の拙論において触れたとおり[1)]、昨今の『百科全書』研究において、この大事典の電子化は重要な動向の一つとなっている。前々回紹介したシカゴ大学 ARTFL『百科全書』プロジェクトサイト、フランス国立図書館の電子サイト Gallica、Wikisource 版『百科全書』に加えて、2016 年秋には、多くの批評校訂版や博士論文の版元として知られるクラシック・ガルニエ社が、パリ＝ソルボンヌ（パリ第 4）大学所蔵のいわゆるパリ版『百科全書』をもとに電子版を完成させ、期間限定で無料試用版を公開した。『百科全書』は、文字通り 18 世紀の知の集大成であるから、この大事典の専門家のみならず、より広く 18 世紀フランスのさまざまな作家、思想家について研究を進める者にとって、常に重要な参照資料であり続けた。その意味で、本文 17 巻、図版 11 巻、補遺 4 巻から成るこの大著が複数のウェブサイト上で手軽に閲覧でき、しかも次第にその精度が上がりつつあるという事実は、今後の 18 世紀研究にも少なからぬ影響を与えるはずである。

こうしたさまざまな電子化の動きの中で、新たな試みと言えるのが、フランス科学アカデミーの支援を得て現在進行中の『百科全書』電子批評版プロジェクト（ENCCRE。以下本論考ではこの略号を用いることとする）であ

1）井上櫻子「『百科全書』の無記名項目の執筆者同定――項目『利子、利息 Intérêt（*Économie politique*）』の場合――」『慶應義塾大学日吉紀要　フランス語フランス文学』、第 63 号、2016 年 10 月、pp. 19–30。

る。なぜならこのプロジェクトでは、フランス学士院図書館所蔵の初版パリ版が電子化されるのみならず、主要項目の典拠情報まで提供されることになっているからである。本年 10 月 19 日、ダランベール生誕 300 年記念とあわせて予定されている一般公開が待ち望まれる。

本論考では、ジャン・フランソワ・ド・サン＝ランベールの執筆項目「利益 « Intérêt »（*Morale*）」読解作業を通してその典拠の一部を明らかにしつつ、『百科全書』刊行企画遂行上、この項目に付与された役割について考察してみたい。そして、現在複数の専門家の手によって着々と進められている『百科全書』典拠研究から期待される成果についても検討してみたい。

Ⅰ．項目「利益 « Intérêt »（*Morale*）」とエルヴェシウス

項目「利益 « Intérêt »（*Morale*）」は、1765 年刊行の『百科全書』第 8 巻に収められた無記名項目である[2)]。サン＝ランベールはディドロやエルヴェシウスなど、当時としてはかなり急進的な唯物論思想の影響を受けながらも、同時にフランス国王軍の一員として仕えた軍人貴族でもあった。そのため、王権と教権に対する批判の書とも言うべき『百科全書』に寄稿するにあたって、匿名性を守り続けた。サン＝ランベールの執筆項目を同定する上で、長らく唯一の資料とみなされたのが、18 世紀末から 19 世紀初頭にかけて刊行された『サン＝ランベール哲学論集』[3)] である。本論集第 6 巻には、当時この作家のものと判明していた執筆項目が再録されているからだ。これをもとに H. ディークマンは、『百科全書』に収録された 13 の項目をサン＝ランベールの筆になるものと確定した[4)]。本論考で考察の対象とする「利益

2）« INTÉRÊT (*Morale*) », dans *Encyclopédie*, t. VIII, pp. 818a–819a.

3）*Œuvres philosophiques de Saint-Lambert*, Paris, Agasse, 1797–1801, 6 vol.

4）その後、ジョン・ラフは、新たに 3 項目「豪奢」、「揺るぎなさ」、「追従」をサン＝ランベールに帰せられる項目と断定した。また、1986 年、フランソワ・ムローはサン＝ランベールの自筆ノートの発見をもとに、この作家の執筆項目数はそれまで発見されていた 16 点よりもはるかに多く、27 点にのぼるとしている。『百科全書』の無記名項目や、あやまって編集者ディドロのものとみなされてきた項目の再検討は、現在『百科全書』研究において最もアク

« Intérêt »（*Morale*）」もこうした項目の一つに含まれている。

この項目で、執筆者はまず、「利益」という語がさまざまな意味合いを持つ語ながらも、まず「その絶対的意味においてとらえる場合、そして『個人』、『集団』、『国民』といかなる直接的関係もない場合には、この語は正義や徳を軽蔑しわれわれに自分の利益を追求させる悪徳を意味するもの」[5] と述べ、さらに自らの主張をさせるべく、1752 年、ジュネーヴで刊行されたヴォルテールの詩集『オルレアンの処女』に見出される詩句を引用している。

そして利益というこの地上の邪悪な王は、
金庫のかたわらで悲しげに考え込んだ面持ちで、
最も弱き者を最も強き者の罪のために売り渡す[6]。

このように、当時文学界で大変な人気を誇るとともに絶大な影響力を持っていたヴォルテールを引き合いにして敬意を払うようなふうを装いつつ、サン＝ランベールは次第に本題へと論を移していく。

「利益」は確かにそれ自体では悪徳なのかもしれない。しかし続く段落で、項目執筆者は「個人、集団、国家の『利益』という場合は（中略）、この語は重要なこと、あるいは国家、個人、私自身などといったものに好都合なことを意味する」[7] と述べる。そして、さらに次の段落に目を移すと、「この意味では、『利益』という語は、しばしば不適切とはいえ『利己心』という語として用いられる」[8] とあり、以下、本項目の論点は「利益« Intérêt »」よりもむしろ、「利己心 « amour-propre »」へと移行していく。サン＝ランベー

チュアルな問題の一つである。

5）« INTÉRÊT », dans l'*Encyclopédie*, t. VIII, p. 818a. 以下本論考において『百科全書』をはじめとする 18 世紀のテクストから原文を引用する場合は、現代綴りを用いることとする。

6）Voltaire, *La Pucelle d'Orléans*, chant. VI, Louven, 1755, p. 58.

7）« INTÉRÊT », dans l'*Encyclopédie*, t. VIII, p. 818a.

8）*Ibid.*

ルが本項目で目指すこと、それは実は「利己心」の弁護なのである。

サン＝ランベールはまず、「利己心」という情念が否定的に捉えられる傾向にあることを意識し、この語と混合される恐れのある「傲慢さ」や「虚栄心」といった情念と論理的弁別を行おうとする。前者は「利己心がわれわれ自身を過大評価し、他人を軽蔑する場合」[9]、後者は「利己心が外へと拡大し、その値打ちもないのに他人の関心を引こうとする場合」[10] だというのだ。そして、これらの情念は、「利己心が常軌を逸した」[11] 状態であると主張する。また彼はさらに論を進めて、「利己心」が時として厳しく人々に断罪されるのは、17 世紀に活躍した著名なモラリストの影響があるとの推測を立てる。ここでまず、批判の対象となるのがジャンセニスト、ピエール・ニコルの『道徳試論』、パスカルの『パンセ』、ロシュフコーの『箴言集』である [12]。「パスカルですら、あの偉大なパスカルも、神が我々に与えたもうた自己愛の感情、われわれの存在の永遠の原動力たるこの感情を、われわれに内在する不完全さ « une imperfection » とみなそうとした」[13] という『百科全書』の一節は、『パンセ』に展開される利己心についての議論 [14] の中でも、とりわけ以下の一節を踏まえたものと思われる。

> 利己心、そしてこの人間の「自我」の性質は、自分しか愛さず、自分のことしか考えないことにある。しかし、どうするというのか。この人が愛する対象は、欠点だらけで実に不幸であることを免れないだろう。その人は偉大でありたいと願うが、取るに足らない人間だと気づく。幸

9）« INTÉRÊT », dans l'*Encyclopédie*, t. VIII, p. 818b.

10）*Ibid.*

11）*Ibid.*

12）*Ibid.* 18 世紀のモラリストの提示する人間論、道徳論については、以下の著作を参照した。Paul Bénichou, *Morales du grand siècle*, Gallimard, « Folio essais », 2016.

13）« INTÉRÊT », dans *l'Encyclopédie*, t. VIII, p. 818b.

14）M. ル・ゲルンによると、断章 41, 143, 403, 428, 524 が「利己心」に関わるものとされる。

せでありたいと願うが、みじめであると気づく。完璧でありたいと願うが、欠陥« imperfections »ばかりだと気づく。人々に愛され、尊敬されたいと願うが、欠点のせいで忌み嫌われ、軽蔑されていると気づくのだ[15]。

ところで、同じく項目「利益」には、「彼［＝ラ・ロシュフコー］は、利己心がわれわれの行動原理であるとの理由で、われわれにはもはや美徳が認められないとした« il ne reconnaît plus de vertus en nous, parce que l'amour-propre est le principe de nos actions »」[16]という一節が見出される。もちろん、類似する文言、議論を『箴言集』の中に求めることも可能であろう。しかし、本項目の典拠としてむしろここで注目したいのは、エルヴェシウスの『精神論』である。

かの名高きド・ラ・ロシュフコー氏が、利己心はわれわれのあらゆる行動の原理であると述べたとき« Lorsque le célèbre Mr. de la Rochefoucauld dit que l'amour-propre est le principe de toutes nos actions »、この「利己心」という語の真の意味を知らないために、どれほど多くの人々がこの著名な作者に異を唱えたことであろうか[17]。

項目「利己心」と『精神論』に等しく、「利己心はわれわれの（あらゆる）行動原理である」という一節が見出されるのは興味深い。さらに加えて、上掲の一節の直後には以下のような記述も認められるのにも心を留めるべきだろう。

人々は利己心を傲慢さや虚栄心とみなし、結果としてド・ラ・ロシュフ

15）Pascal, *Les Pensées*, Éditions de Michel le Guern, Gallimard, « Folio », 1997, fragment 758, p. 499.
16）« INTÉRÊT », dans l'*Encyclopédie*, t. VIII, p. 818a.
17）Helvétius, *De l'Esprit*, Fayard, 1998, Discours I, chap. IV, p. 45.

コーはあらゆる美徳の源を悪徳の中に位置付けたのだと考えた[18)]。

「人々は利己心を傲慢さや虚栄心とみなし」という一節は、『百科全書』の項目で、「利己心」と「傲慢さ」、「虚栄心」は同一のものではないと定義づけられていたことを思い起こさせる。実際、サン＝ランベールが『精神論』のこの一節に関心を寄せていた可能性はきわめて高い。というのも、彼は1772年刊行の『エルヴェシウスの生涯と作品についての試論』（以下『エルヴェシウスの生涯と作品』と略す）において、『精神論』の内容を要約しつつ、先に挙げた一文につづくくだりをほぼそのまま引用しているからだ。

利己心は、自然によってわれわれの中に刻まれた感情で、好み、情念、状況の違いによって徳にもなれば悪徳にもなる[19)]。

それでは、『百科全書』の項目において、『精神論』を引き合いにすることはどのような意味を持ったのか。以下、『エルヴェシウスの生涯と作品』を参照しつつ検討してみたい。

18）*Ibid.*

19）« L'*amour-propre* est un sentiment gravé en nous par la nature, et qui devient vertueux ou vicieux, selon la différence des goûts, des passions, des circonstances. » : Saint-Lambert, *Essai sur la vie et les œuvres d'Helvétius*, dans *Œuvres philosophiques de Saint-Lambert*, t.V, p. 234.

この一文は、『精神論』の以下の一文を踏まえたものと考えられる。« Il était cependant facile d'apercevoir que l'amour-propre, ou l'amour de soi, n'était autre chose qu'un sentiment gravé en nous par la nature ; que ce sentiment se transformait dans chaque homme en vice ou en vertu, selon les goûts et les passions qui l'animaient, et que l'amour-propre, différemment modifié, produisait l'orgueil et la modestie » : Helvétius, *De l'Esprit*, Discours I, chap. IV, p. 45（下線は論者による）。

Ⅱ.『精神論』の擁護者、サン＝ランベール

『エルヴェシウスの生涯と作品』は、この思想家の遺した寓意詩『幸福』[20]の出版に際して添えられた匿名の序文で[21]、唯物論的感覚論が展開されているためにフランスの神学者、イエズス会およびジャンセニストによって断罪[22]された『精神論』の弁護を主たる目的としたものである。特に、『精神論』が厳しい批判の対象となった経緯については、その争点を中心に手際よくまとめられているから――特に検閲を行ったソルボンヌの神学部が指摘した問題点については詳しい[23]――、この問題作の出版と受容に関する当時の状況を知るのに好適の資料である。そして、数々の批判の中でも、『百科全書』との関連性において特に目を引くのが次の一節である。

> 人々は、エルヴェシウスがあらゆる美徳を消してしまったとさえ言った。なぜなら、彼は利益をあらゆる行動の動機としたからだ。だが、エルヴェシウスは利益という語をもって何を表そうとしたのか。快楽への愛、痛みへの嫌悪感だ。それでは、彼の主張はどのようにまとめられるのか。「美徳においても、快楽においても、われわれの幸福への欲求が常にわれわれの動機となっている」という永遠の真実である[24]。

20）Helvétius, *Le Bonheur, Poème en six chants. Avec des fragments de quelques Épîtres. Ouvrages posthumes d'Helvétius*, Londres, 1772.

21）ただし、執筆者はサン＝ランベールであることは、1772 年 1 月の時点ですでにグリムによってほのめかされている（*Correspondance littéraire*, IX, p. 420）。

22）Saint-Lambert, *Essai sur la vie et les œuvres d'Helvétius*, dans *Œuvres philosophiques de Saint-Lambert*, t.V, pp. 253–259.

23）*Ibid.*, pp. 254–255.
『精神論』に展開される人間論に対するカトリックの批判については、以下の論考に詳しい。森村敏己『名誉と快楽　エルヴェシウスの功利主義』、法政大学出版局、1993 年、pp. 44–53.

24）Saint-Lambert, *Essai sur la vie et les œuvres d'Helvétius*, dans *Œuvres philosophiques de Saint-Lambert*, t.V, pp. 260–261.

「エルヴェシウスは利益をあらゆる人間の行動の動機とした」という当時の読者の非難、あるいは「幸福への欲求が人間の動機になっている」という主張は、『精神論』における次のような議論を踏まえたものと考えられる。

> 私が述べたいのは、あらゆる人は自身の幸福のみを目指しており、人々をこうした傾向から守ることはできず、そのように試みても無駄であるし、それに成功しても危険だということ、つまり、個人の利益を全体の利益に結びつけることでしか、彼らを徳高き人々にできないということだ[25)]。

そしてさらに注意すべきは、『エルヴェシウスの生涯と作品』に7年先立って刊行された『百科全書』の項目「利益」にも、「最後に、『精神論』という書物の作者は、いかなる徳も存在しないと述べて強い批判を受けた」[26)]と、この思想家の徳に対する考え方への人々の批判に触れたくだりが認められることである。つまり、『百科全書』の項目執筆時からすでに、サン＝ランベールはエルヴェシウスの思想に対する批判に関心を寄せ、なんらかの形で弁護しようと試みていたことが看守されるのである。ただし、弁護に際して用いられる論理展開は、『エルヴェシウスの生涯と作品』とはやや異なっている。

> 彼がこのように［＝いかなる徳も存在しないと主張したかどで］非難されたのは、美徳が純粋に人間の慣習の産物だと述べたからではなく、ほぼ決まって「利益」という語を「利己心」という語の代わりに用いたからである[27)]。

『百科全書』に認められるこうした解説は、『エルヴェシウスの生涯と作品』

25）Helvétius, *De l'Esprit*, Discours II, chap. XV, p. 152.
26）« INTÉRÊT », dans l'*Encyclopédie*, t. VIII, p. 819a.
27）*Ibid*.

に見られる議論といささか異なっている。というのも、『エルヴェシウスの生涯と作品』には、ソルボンヌの神学部が断罪した命題の一つとして「人々を有徳の士とするのは、善き法である」[28] という命題を挙げているからである。つまり、サン＝ランベールは『百科全書』においてエルヴェシウスが非難されたのは「美徳が純粋に人間の慣習の産物だと述べたからではない」とあえて述べることで、人間の徳ないし道徳的感情は、社会生活を行うなかで後天的に獲得されるという『精神論』の基本的主張の一つになんら問題はないという見解を示していると考えられるのである。さらに、人々が『精神論』の作者を糾弾したのは、「ほぼ決まって「利益」という語を「利己心」という語の代わりに用いたからだ」と付言することで、語の誤用[29] が読者の間に誤解を生じさせたに過ぎないとし、エルヴェシウスの人間論自体には瑕疵はないと強調しているとも言えよう。実際、「利益」という項目でサン＝ランベールが試みたのは、しばしば混同される傾向にある「利益」と「利己心」の弁別と「利己心」の擁護であった。本項目でサン＝ランベールが一貫して「利己心」の肯定的な捉え直しを促す議論を展開したのは、最終的に『精神論』の弁護を目的としたものだったのである。『百科全書』の典拠に立ち返ること、それは当時の思想界における論争の内実を知ることをも可能にしてくれるのである。

よく知られているように、『精神論』の出版許可取り消しおよび焚書処分は、『百科全書』の出版許可取り消しの直接的要因の一つとなった大事件であった。エルヴェシウスの著作を弁護することは、また同時に百科全書派の試みを肯定し、『百科全書』出版再開企画を成功裏に進めるために、おそら

28）Saint-Lambert, *Essai sur la vie et les œuvres d'Helvétius*, dans *Œuvres philosophiques de Saint-Lambert*, t.V, p. 254.

29）「語の誤用」という問題は、18 世紀の思想家たちが関心を持った主題の一つである。そして、エルヴェシウスも『精神論』第 1 講第 4 章でこの問題について取り組んでいる。さまざまな思想家が提示した「語の誤用」に関する見解ついては、以下の論考によく論点がまとめられている。Urlich Ricken, « Réflexions du XVIIIe siècle sur ‹ l'abus des mots ›», dans *Mots*, vol. 4, nº 1, 1982, pp. 29–45.

く必然の作業と捉えられていたのだろう。確かにサン＝ランベールはこの大事典に寄稿するにあたり、匿名性を守り続けた。しかしそれは、彼が百科全書派として消極的姿勢を守ろうとしたからではない。1764 年、『百科全書』刊行再開前年に刊行されたサン＝ランベールの「奢侈論」――のちに項目「奢侈」として『百科全書』に組み込まれる論考――を、グリムが大事典の宣伝に利用したことからも分かるように[30]、すでに作家としての人気を確立していたサン＝ランベールに対する百科全書派の期待は高かった。そしてこのロレーヌ出身の詩人が執筆した項目のいくつかからは、彼が自ら立つ思想的陣営を守ろうという使命感に貫かれていることが確認できるのである。

Ⅲ．項目「利益」の受容

それでは、項目「利益」は当時の読者にどのように受容されたのか。最も早く反応したのが、『百科全書新聞（ジュルナル・アンシクロペディック）』の創刊者にして主要執筆者ピエール・ルソーである。1756 年創刊のこの定期刊行物には、新刊書に関する情報が詳細に記載されているが、なかでもピエール・ルソーの強い関心を惹いたのは『百科全書』だったようだ。というのも、1766 年 8 月 15 日号冒頭で「ついに不滅の著作が出版された。フランス、そしてその著者となった哲学者、学者、文学者、芸術家にとって名誉となる作品だ。」[31] と記して長らく中断されていた『百科全書』の刊行が再開されたことを喜びつつ、この大事典に惜しみない賛辞を送ったのち、彼は『百科全書新聞』の各号冒頭の数十ページを割いて、読者の興味を惹くであろう項目を引用し、自らの所感を書き綴っているからである。

本論考で検討した「利益」については、1767 年 6 月 1 日号で紹介されている[32]。« Intérêt » という語が多義語であるせいもあるだろう。『百科全書』には « Intérêt » という語、あるいはこの語を含む表現を見出語とする項目が

30）Jacques Proust, *Diderot et l'*Encyclopédie, Albin Michel, 1995, p. 67.

31）*Journal Encyclopédique et universel*, 15 août 1766, t. VI, Ier partie, p. 3.

32）*Journal Encyclopédique et universel*, 1er juin 1767, t. IV, IIe partie, pp. 11–17.

17 点確認され、道徳、文学、算術、経済学などさまざまな観点からこの語の定義が試みられているが、その中で唯一ルソーの検討対象となっているのが、サン＝ランベールの筆になる項目なのである。ここでまずルソーは、「（利益という）この自己愛に基づいた感情は、モラリストたちを奇妙な誤解に陥れている」[33] と主張し、無反省に「利益」を求める人間のあり方を批判するモラリストたちを批判する議論を展開する。その中であたかも自分の論であるかのように『百科全書』の項目「利益」の一部が引用され、ピエール・ニコル、パスカル、ラ・ロシュフコーらが槍玉に挙げられているのだ[34]。

しかしその一方で、エルヴェシウスの『精神論』を擁護する一節については、ルソーは「『精神論』という書物が非難されたのは、『利益』という語のせいではなく、あまりに正鵠を射た原理を引き出した不吉な論理的帰結のためだ」[35] と述べ、『百科全書』に展開される議論に疑義を挟んでいる。確かに、ルソーはサン＝ランベールの見解を全面的に受け入れることに慎重な態度を示している。とはいえ、項目執筆者に対するルソーのこの返答は、『精神論』とその作者エルヴェシウスの弁護という問題が、きわめてアクチュアルなものであったことを物語っているとも言えよう。そしてまたこうした読者からの返答が、サン＝ランベールにさらに筆を執らせるきっかけともなっている。『エルヴェシウスの生涯と作品』において、彼がこの思想家の人となりと著作についてより細かく解説し、再度弁護を試みているのはおそらく同時代の読者の反応を意識してのことだろう。

＊＊＊

33）*Ibid.*, p. 11.

34）*Ibid.*, pp. 14–15.

『百科全書』に見られるこのような借用のプラクシスについては、以下の論考に詳しい。Olivier Ferret, « La philosophie de l'emprunt : Jaucourt et l'histoire de l'Espagne dans l'*Encyclopédie* », dans *Recueil d'études sur l'*Encyclopédie *et les Lumières* (Société d'études sur l'*Encyclopédie*), nº 2, mars 2013, pp. 181–203.

35）*Journal Encyclopédique et universel*, 1er juin 1767, t. IV, IIe partie, p. 16.

これまでの『百科全書』研究は、長きにわたって編集長ディドロを中心に、著名な寄稿者とその著作との関連性から読み解くことに作業の力点が置かれてきた。しかしENCCREプロジェクトが進められる中で次第に明らかになってきたのは、ジョクールのように現在まで読み継がれる主著はなくとも、『百科全書』の執筆・編集作業において多大な貢献をした人物や、無署名であるために必ずしも検討対象として注目を集めてこなかった項目に再び光を当てることで、容易には把捉できないこの大事典の生成過程の複雑な内実を再検討する可能性があるという点である。それはまた、いわゆる大思想家の著作の読解作業からだけではすくい取れない思想的論争の現実を捉え直すきっかけともなるはずだ。

さらにENCCREプロジェクトは、この企画を牽引するM. レカ＝ツィオミスの博士論文『「百科全書」を執筆する　ディドロ：辞典の使用から哲学的文法へ』[36] の基本的主張を踏まえながら、『百科全書』をアンシャン・レジーム期の辞（事）典類の発展史の中に位置付ける必要性をも示唆している[37]。言うまでもなく、この大著に収められたおびただしい数の項目の一つ一つについてこうした作業を進めるのは一朝一夕にはできないことだ。しかし、複数の辞（事）典の比較対照を行うことによって、語の定義・使用法の変遷に注目する新たなインテレクチュアル・ヒストリーが明らかになることは間違いないだろう。その意味において、ENCCREプロジェクトは新たな18世紀学のアプローチの可能性を確かに示してくれていると言える。

付記：本研究成果は、平成29年度文部科学省科学研究費補助金・基盤研究（C）（課題番号17K02601）の助成を受けたものである。

36）Marie Léca-Tsiomis, *Écrire l'*Encyclopédie, *Diderot : de l'usage des dictionnaires à la grammaire philosophique*, Oxford, The Voltaire Foundation, *SVEC* 375, 1999.

37）2017年7月末時点で公開されているENCCREのサイトでも、『百科全書』の典拠としての辞典類、この大事典の受容のあり方を示す定期刊行物、辞典類などの書誌情報が充実しているのはそのためである。
http://enccre.academie-sciences.fr/encyclopedie/enc_sources_suites.php